

定点観測

成田重行流
「地域開発の戦略学」

3

大島と緑の真珠——復興そば物語

東日本大震災で巨大な津波が東西から何度となく襲った宮城県気仙沼市の大島。なだれ込んだ大量の海水で島が分断されるほど、その破壊力はすさまじいものだった。それから半年が過ぎた2011年8月。島内のあちこちで残りが残るなか、何かを探し歩いていた成田重行さんは見覚えのある白い花を見つけた。ソバである。その瞬間、「体中がしびれて、一瞬放心状態になった」という成田さんは、その花に何を見たのか。 文・撮影／窪田新之助

で6000人を超える生徒を輩出してきた。そのなかには全国で名の知られる店を開いた人も少なくない。

それから文章を書くのも得意中の得意。10冊ほどの著書があるほか、かつては雑誌の編集長をしていた経歴も持っている。もちろん、ソバに関する著書も『こだわりのそば打ち入門』『男のためのそば打ち入門』(ともにNHK出版)がある。

昔食べていたソバに「旅人」は興味を抱いた

そんな多才な人物には10に及ぶ小説を取めた『気仙沼大島 復興そば創作物語』という未発表の作品がある。時代は江戸のころ。登場する人物は前号で紹介した、大島に暮らす水上忠夫さん、俊光さん、清水洋祐さんら。それぞれに村主や悪代官な

どの役を当てている。そのなかに大島を訪れた「旅人」という登場人物に焦点を当てた「ガレキの中のしろい花」がある。さわりだけ抜粋しよう。

昔、一人の旅人が津波で被害のあった大島を訪れました。海岸には大きな松の木が根こそぎ倒れ、舟も陸に上げられ、大松のてっぺんに漁具が絡み付いていました。

真夏の太陽が照りつける中、旅人は長崎の丘を登っているとパンパンと板を叩く音が聞こえました。音のなる家の庭先を見ると、若い奥さんが海から上がったばかりの岩ノリ、マツモを板に手で張っていました。この若い奥さんは島でも海藻採りの名人で名前をおすみさんといいます。

突然だが、筆者は成田さんと知り合ってからまだ3カ月である。お会いしたのは延べ日数で1週間ほど。その短い日数の間でも、成田さんにはいくつも驚かされることがあった。そのひとつは「多才さ」である。成田さんは、中国茶の諸事において超一級であるし、筆を執らせればじつに味わいのある字や絵で表現される。そうした数多ある才能のなかで、ここで紹介しておきたいのは「ソバ」と「文章」である。成田さんはソバにも精通している。それも栽培から麵打ちなどあらゆる面においてだ。長野県は八ヶ岳のふもとに畑を持ち、仲間たちと一緒にソバを作っている。収穫したソバを打つのはお手の物。何しろ40年以上の実績がある。その腕を伝授する「蕎麦サロン」を主宰し、これま

プロフィール

成田重行 (なりた しげゆき)
1942年生まれ。70年立石電機(現オムロン)入社。91年同社常務取締役、2001年ナルコーポレーション代表。地域プロデューサーとして、全国30カ所の市町村で地域の活性化を支援してきた。05~09年スローフードジャパン副会長、2000年中国国際茶文化研究会名誉理事。多摩大学、立教大学、東北福祉大学などで講師・教授を務めた経歴もある。



大島と緑の真珠—復興そば物語

普段はおとなしく、おしとやかですが、海に出ると一変、目の鋭い狩人になり、ヌルヌルの岩を飛びまわり、ねらう海藻を次々収穫します。

旅人が庭をのぞいているとおすみさんが「お茶でもいかがですか」と声をかけました。

母屋の縁側に腰をかけお茶をいただきます。

話は島の苦しい生活や先が見えない不安でいっぱいでした。津波の被害を受ける前は何不自由ない生活でしたが、今はむしろ大昔の生活に戻りたくないと思っていました。

その昔、米が採れないこの島はそば粉を湯で溶きとろみの汁を麦飯にかけ食べていたそうです。

旅人はこの島で昔食べていたそばに興味を感じました。

（『気仙沼大島 復興そば創作物語 (7)』）

復興に向けた一筋の光 ソバの白い花

本連載の読者の方なら、「旅人」とは誰のことかお察しだろう。成田さん自身のことである。まさに旅人が見た景色は、成田さんが震災後に目にした大島の惨状だ。

旅人ならぬ成田さんは、震災が起きてから大島に毎月のように来ていた。大島が復興する手がかりはどこ

にあるのか。その一筋の光を求めて、島の古老たちに伝統的な食文化について尋ねていった。

そんななかで『創作物語』にあるように、ある人たちが大島でかつてソバを食べる習慣があったことを語ってくれた。それは前号に登場した水上忠夫さんと妻のひろ子さん。忠

夫さんは市議会議員や漁協の理事などの重職を務めてきた島のリーダー的な存在である。成田さんは過去に

何度もソバによって地域開発をしてきた。だから、忠夫さんやひろ子さんからその話を聞いたとき、大島でもソバで復興のための事業を興せる

かもしれないとひらめいた。

次の日から、さっそく島内を歩き回り、ソバ文化の痕跡を探し始める。どこかに、こね鉢や麵棒、石臼などの道具が転がっていないかと思つた

わけである。ただ、まさか、そのものずばりを見つけられるとは想像も

していなかったようだ。がれきのなか、なんとソバの花が咲いていたのだ。そのときの衝撃について次のように書いている。

「エーッ！—こんなところにそばの花！—この瞬間、体中がしびれ一瞬放心状態になった。そば、そばと探し回っていたその中で今、眼前にあらわれたので、まさに『不思議発見である』」

さっそく島民に「不思議発見」を伝えたそうだが、最初は誰も信じなかったそう。誰も栽培していないのだから、当然といえる。

震災下を生き延び 花開いたソバ枕の実

それにしても不思議なのは、なぜソバの花が咲いていたのかである。確かに大島には、かつて島内のあち

こちにソバ畑があった。ここは昔からコマは取れない代わりにソバを主食としていた。

ただ、ソバ畑があったのは過去の話である。いまでは誰もソバを栽培

していないし、家でソバを打ち、食べるという習慣も失われてしまつて

いる。だから余計にソバの花が咲いていたのは不思議である。ただ、不思議を不思議

にさせておかないのが成田さん。不思議

は発見の母なのだ。

本連載で何度か述べたように、成田さんはこれから開発する地域に入ったら、

手始めにやる



地盤が沈下した海辺



防波堤。東日本大震災で地盤が沈下し、上部の壁を増設することになった

3つのことがある。そのひとつは「根っこを探る」。根っこはその土地の歴史や伝統文化である。今回もさっそく島の古老である水上忠夫さんに聞いてみると、面白いことがわかってきた。

古来、大島ではソバ枕を使う風習があった。枕のなかに入れておくのは、一般的なソバ殻ではなく、穂から取っただけの玄穀。なぜかといえば、いざというときの非常食にするためだ。

大島を津波が襲ったのは東日本大震災が初めてではない。近現代においても「明治三陸地震」や「昭和三陸地震」などで大きな津波に襲われている。そうした非常時にソバの玄穀があれば、その実をゆがいて粥にしたり、製粉して麵に打つたりして

食いつなげる。また畑にまけば、およそ75日もすれば実をつける。おまけにやせ地でも育つ。

現代のように缶詰やレトルト食品がない時代にあってみれば、島民にとつて早急に非常食を確保できるかどうかは、それこそ命にかかわることだった。戦国時代の武将たちは、城が敵兵に囲まれて兵糧攻めに遭うことを想定し、城主は城の壁に穀類や木の実などを埋め込んだそうだ。

成田さんは、以上のような事実を基にして、ソバの花が咲いていた理由について次のような推測をした。津波に家が打ち砕かれた際、ソバ枕ももみくちやになつて、その生地が破れ、なかにあった実が辺りに散乱した。やがて潮が引いた大地で、その実はひっそりと育ち、がれきのから白い花を見せたのだろうと。成田さんは後日、そのときの胸からあふれそうになるさまざまな思いを、次のように書き残している。

「まさにここ気仙沼大島の先人はすばらしい知恵をもっていた。すごい。私は謎が解けたので、再び現場へそばの花を見に行った。枕のそばの実がこうやってガレキの間から見事に花を咲かせているのか。この地域は多くの方々が津波の犠牲になったと聞いている。この人たちの命に代わつて、海水につかつた塩分の含んだ

土の中から力強くも可憐に咲く花。私はそばの花の前にしゃがみこんだ。こみあげる涙がとまらなかつた。」

うんざりした毎日に変化が起きる予感

ソバで復興すると決めた。とはいえずでに9月。播種にはいささか遅い。それでも少しでも収穫できればと思い、急いで東京から種を取り寄せて、まくことにした。

相談した相手は「気仙沼ちゃん」こと、元アイドルの白幡美千子さん。美千子さんは「それなら復興そばと名づけて、お客様にふるまいましょう」となった。

そこで組織したのは手打ちを習得し、ソバをふるまうことを目的とした「気仙沼大島 蕎麦サロン」。成田さんが講師となり、メンバーとなった島民16人にソバ打ちを伝授した。これは被災後、仕事や生きがいを失っていたメンバーに生きる活力を与えたようだ。

前号で詳しく紹介した漁師の水上俊光さんは「海を見るたびに、うんざりする毎日だった。そんなときにソバの話が来た。何か変化が起きるのではと、うきうきした」という。

津波で妻を失った清水洋祐さんは、サロンを開催した初めてのころは

悲しみのなかをさまよっているような状況だったという。成田さんが当時書いた記録を見ると、「口の先端をややしぼり、眉間にたてしわをつくり緊張していた」「外見ではそばに興味があるのか、おもしろくないのかさっぱりわからず」といった様子だった。ただ、日を追って練習を重ねるうちに、ある日、変化が訪れる。ソバの打ち粉をふるるとき、「大胆に足でリズムをとりおどけながら打ち粉をふった」。周りが笑い、清水さんも初めて笑った。

子どもたちにソバを教える親に対する最高のアピール

サロンでソバ打ちを習得したメンバーたちは生きる自信を得たのだろう。そして、小学校の「総合学習」の時間で、児童たちにソバの栽培から収穫、手打ちの仕方などを教え始める。ほとんどの児童は手打ちソバを食べたことがなかったが、多くの児童は授業で多くのことを学んだようだ。なかには、優秀な成績を取ったときなどのご褒美に、ソバ屋に連れて行ってくれとせがむ児童もいる。成田さんが「彼はすごいよね」というその児童は、大人になったら、なんと大島でソバ屋を出店する野望を持っている。すでに店の間取りや名前を考えているというから面白い



大島小学校の先生方。総合学習の時間で児童にソバについて教えている

ではないか。

同時に押さえておきたいのは、児童のソバ作りには親が関心を持ったことだ。ある児童は学校の授業が終わってから、ソバ畑に駆けつけて、その生育を見守った。すると、親も付いてきて、児童と一緒に観察したり、農作業を手伝ったりするのだ。そうやって島民全体に「復興そば」の存在が認知されていった。

この手法は、本連載の1回目で紹介した新宿での内藤とうがらしと同じである。成田さんは東京・新宿で内藤とうがらしの存在を広めるにあたり、小学校で児童を相手に内藤とうがらしのことを紹介する授業を続

大島と緑の真珠—復興そば物語

まさに、この手を大島の「復興そば」でも使ったのだ。この狙いは一定の成果を得たといえる。小学校ではいまでも「総合学習」の時間で児童たちが「復興そば」について学んでいるし、サロンが主宰するソバ打ちのイベントは盛況である。まだ事業に至っていないものの、島民同士で多くの交流が生まれ、「復興そば」



「気仙沼大島 蕎麦サロン」主催のソバ打ち体験

けている。成田さんはその意図について次のように語っていた。「内藤とうがらしを作る子どもたちは、そのことを親に話す。それは内藤とうがらしの存在を知ってもらおうという意味で、親に対する最高のアピールになる。こういう下地を作っておけば、新宿各店で内藤とうがらしのフェアがあったときに、親も、子どもも、すぐにびんとくる。もちろん各店にとっても、地域住民が栽培に取り組んでいるんだから、自分たちも何かやろうという動機づけになる」

は認知された。

小さいものを見るまなざし 立ち止まり、しゃがみ込む

それにしても感心してしまうのは、成田さんが、水上忠夫さんとひろ子さんから大島にソバを食べる習慣があったという昔話を聞いたとき、わざわざその痕跡を探し回った点である。ソバを作って食べるだけでなく、東京からソバの実を取り寄せて、畑にまけば済む話である。ただ、それだけはいけなかったのだ。

特定の方法論を持ち込んで、即座に成果を求める地域開発は「成田重行流」ではない。成田さんが大事にしているのは「成果」ではなく「プロセス」である。そのプロセスこそがほかにはない物語をつむぎだす。そのため成田さんは、かつて大島にソバ文化があったことを証明するものを求めた。その痕跡はがれきのなかにひっそりと咲く花だった。そうした小さいものこそ「成田重行流」の地域開発には大事なのである。それを探するために歩き、ときに立ち止まったり、しゃがみ込んだりしたのである。成田さんは言う。

「小さいということはですね、立ち止まらないとわからないんですよ。立ち止まらないと見えないんです。止まることは、いったん、自分のリズムを取って、ちょっと休憩してですね、ほっと見る、止まってみる。そうすると小さいものが見えるんですよ。これは流れのなかでは見えます。それから立ち止まった後、しゃがみ込まないと見えてこない。立ち止まること、それからしゃがみ込むこと、この2つは都会ではできない。立ち止まったり、しゃがみ込んだりしたら、後ろから人に突き飛ばされますからね。でも、この2つは小さいものを一生懸命見ようと思ふと、必ずやらなければいけない行

為なんです」

立ち止まり、しゃがみ込んで見えてきたのは白い花だった。ただ、それはどこにでもあるソバの花ではない。大島にしか咲かないソバの花であった。

見過ごしがちな「唯一性」 そこにしかない物語

成田さんは、地域開発を成功させる絶対条件として「時代性」「連携性」と並んで「唯一性」を挙げる。「唯一性」というのは言葉を換えれば、「オリジナルとか、ここしかないという特性」だという。

全国どこに行っても、ソバで地域開発をするところはある。ただ、津波で枕の生地が破れ、そのなかに非常食として入れられていた実が自然とまかれたという経緯を持つソバはどこにもない。震災で心に深い傷を負った人たちが、そこに一筋の希望を見いだし、ひたすらに打ち方を学んだソバはほかにはない唯一のものである。

おそらくどの地域にも「復興ソバ」は転がっている。地域を盛り上げる素材はどこかにあるのだ。ただ、小さいから、それに気づかないだけである。その所在を知るには「立ち止まり、しゃがみ込んでみる」ことである。